



班員：(班長) 上山洸介 (副班長) 岡野勇太 (書記) 鈴木颯子
(渉外) 入安ディリ、角田圭吾 (DB) 迫屋景亮、及川智也
担当教師：松原康介 TA：渡邊智也

1.はじめに

私たちの班のテーマは「つくばの都市計画史」である。つくばの都市計画史といわれると、1970 年代以降の研究学園都市の開発、そしてその結果生まれた都市の内部に目を奪われがちである。しかし、「つくば」には研究学園都市とは違う雰囲気を持つ集落も存在する。私たちはそこに目をつけ、数あるそのような集落の中から谷田部という地域を選び、その歴史について研究を行った。なぜ谷田部を選択したのかというと、伊能忠敬が作成した地図において現在のつくば市のある場所に「ヤタへ」と書かれていたからである。この地図に谷田部が記載されているということは、谷田部は当時から発達した街を構築しており、この地域の中心だったのではないかと考えたのである。しかし、現在私たちが抱く谷田部のイメージには発達した都市という感覚はなく、むしろ衰退しているというイメージである。このイメージと反する事柄に興味を持ち谷田部について研究することに決定した。実際に訪問してみるとシャッターの降りている店が多く、想像以上に衰退していることが分かった。これを出発点に私たちの班は、なぜ昔の地図に書かれるほどのまちが現在のように衰退してしまったのかを明らかにし、さらにはこの衰退が問題であると考え、改善策を考案しようと思い、今回研究を行った。

2.目的

私たちの班の研究の目的は、かつては行政の中心地として役割を担っていた谷田部が現在衰退しているということを問題として認識し、その原因を追求して谷田部地域を活性化させることである。単に活性化と言っても抽象的であり、ここで私たちが目指す活性化とは、私たちの提案によって谷田部の魅力を伝達し、谷田部を訪れる、歩いてみる人の数を増加させることである。活性化の理由をこのように定義した理由は、まず谷田部の認

知度が低いということである。どんなに魅力的な都市であっても認知されなければ意味がないのである。次に、谷田部の魅力を味わうためには歩くことが欠かせないと思うからである。谷田部は歴史的な町であり歴史的建造物が多いことから、それらをじっくりと味わうためには歩くことが一番であると思う。谷田部付近には、みどりのという比較的新しい地域があるが、みどりのはつくばエクスプレスの駅があるため、多くの人が電車ですぐに出かけていると思われる。みどりのに限ったことではないが、谷田部に訪れる人が少ないのは谷田部の魅力に気づいていないからであると思われる。特にみどりのは谷田部付近であることから、谷田部の魅力を伝達できれば、その魅力に引き寄せられ、歩いて訪れる人の増加が期待できる。またみどりのに限らず多くの人に谷田部の魅力を伝達することで谷田部の活性化がより促進されると考える。私たちは以上のことを目指す。

3.谷田部概要

谷田部は、茨城県つくば市の南西部に位置し、2022 年 11 月現在人口 6631 人、面積約 5.608km² である。谷田部市街地は旧谷田部町の中心として発展してきて、従来生活拠点の役割を担ってきた。陣屋町として栄えたこともあり、町中には歴史を感じられる建物や名所が残っている。最近では、『谷田部タウンネットワーク』が谷田部の活性化に向けて様々なイベントを開催している。市街地の旧街道上にある商店街は、蔵元で醤油、味噌を醸造、販売を行っており、創業 130 年の和洋菓子店や唐揚げやもつ煮込みを販売する自動販売機があるといったような特色ある商店街である。周囲には、谷田部 IC があり、交通の利便性が高い。最寄り駅のみどりの駅周辺はつくばエクスプレスの開通により開発が進み人口が増加している。

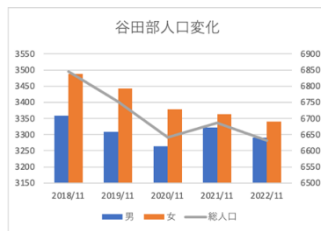


図 1 谷田部の人口変化 [つくば市, 2018]

4. 調査方法

主に、地図の比較、フィールドワークを行う。文献調査は谷田部やつくば市の歴史や都市計画に関する資料や書籍、先行研究などを広く収集し、谷田部に対する理解を深めた。地図の比較では、異なる年代の地図を比較し、地図上で見える土地利用の変化などから谷田部の変遷について考察した。フィールドワークでは、実際に谷田部を何度か訪れ、対象地域を実際に目で見て歩いて雰囲気を感じ取ったり、写真を撮ったり、商店街で買い物やインタビューを行ったりした。

5. 文献調査（谷田部の歴史について）

谷田部はつくば市でも有数の歴史ある町である。江戸時代には陣屋が存在し、明治期には筑波郡の役所が置かれた。政治の中心地としての機能だけではなく、商業の中心地としての機能も持っていた。これは大正時代、交通の結節点として交易が盛んであったことによるもので、現在でも商店街ではその名残が見られる。つくば市としては街道に沿って民家が並ぶような集落形態が多いが、谷田部は陣屋のおかれた場所を囲うように集落が形成され、職住一体の生活が為されていた。

谷田部の政治、商業機能は筑波郡などの周辺地域にとって非常に大きなものであった。1955 年の谷田部町合併では、周辺地域から旧谷田部町への吸収合併であったと記されていることや、大正期に建てられた獣霊碑には周辺の様々な地域から多くの恩恵を受け商業が成り立っていたことを示す記録が残されている。しかし、これらの機能は 1960 年代以降様々な要因から衰退の一途を辿っていくこととなる。ひとつは「研究学園都市構想」である。谷田部にとって異質な時代への突入となる存在であり、大規模な開発や新たな商業施設ができたことで生活は大きく変わる事となった。また機能衰退の要因として「モータリゼーション」があげられる。高度経済成長期では車が大衆化され、職住一体の生活をしていた人々は大きな影響を受けることとなる。さらに、政治機能

と商業機能の相互作用が失われたこと、周辺地域とのつながりが少なかったことも要因と考えられる。

○農業

谷田部地域は広い平地と豊富な水系に恵まれた発展を続けてきた。戦前は周辺が田んぼに囲まれた地域であったことから「タニシ町」と呼ばれることもあった。戦後は農地改革で自作農が増え、さらに合併が起こったことで都市化が進んだ時でも一定水準の農業機能を有していた。しかし研究学園構想時には地価の上昇で農地の切り売りが起こり若い農民が姿を消すこととなった。農家形態は老人を除いて何らかの形で労働者化する傾向を深めた。谷田部 IC など大規模な開発も起こり、困難な土地問題を含みながらだんだんと都市化を進めたことで農業経営が困難になった人、放棄せざるを得なくなった人は多かった。また、高度経済成長期の工場誘致が進んだことで兼業農家が増えた。

○商業

上記で示したように谷田部は商業地域として発展してきた歴史をもつ。主に筑波郡の南西側とのつながりがあったこと、谷田部とほかの地域で階層性があったことが判明している。商店街を中心として職住一体の商業構造をとっていたが、農業同様で後継ぎ問題が起こり、徐々に衰退したことで現在ではシャッター商店街となっている。都市化が起こり、高度経済成長期などでは工場誘致がたびたび起こったこと、さらに研究学園などの開発地区で大規模な商業施設ができたことで商業構造の変化の影響を大きく受けた。

6. フィールドワーク

実際にフィールドワークをして谷田部の歴史的な建築物・道を確認することができた。それを以下に記す。

・五角堂（指定遺跡）

谷田部の歴史的な科学者である飯塚伊賀七という人物が建てた建築物である。正五角形という珍しい形をしていて、建立当時から有名な建築物であった。

・御殿玄関

江戸時代につくられた陣屋の玄関である。現在では谷田部小学校が陣屋の跡地に建てられているが、この玄関のみは現存している。

・千歳通り

「町の庭」としての機能と人、自転車、自動車が安全に通行するための「序列共用道路」としての機能を持つ。商店街の通りから市役所があった場所につながる道であるが、市役所が移転したことでそれほど車どおりが多くはない。現在でも町のイベントなどで使われる

7.ヒアリング調査

商店街の方々にヒアリング調査を実施した。主な質問項目は、①過去の谷田部の様子について②過去と比較した現在の谷田部の様子について③谷田部の魅力④谷田部の問題点だ。ヒアリング調査の結果（ヒアリング調査の情報を取捨選択し重要な情報を記す）、ほとんど全員が谷田部の魅力として「住民の人柄がいい」と回答した。これは実際にヒアリング調査に協力的だったことから分かる。また、商店街の衰退は後継者がいないためであることがわかった。研究学園都市建設が衰退の直接的な原因ではないことは意外な結果だった。ヒアリング調査の情報をまとめると、つくば市が合併・発展したことにより、個人商店以外の働き口が周辺に出現し、世代交代に失敗した商店街は衰退していった。また、多くのお店で配送業務を行っており、最近では昔からの店舗営業から配送にシフトしている。これは商業の中心が他の場所に移動した今も、土地勘や人脈・長年の営業実績が信頼されていることの表れだ。これだけ愛されているお店が谷田部にはあり、谷田部盛り上げる潜在的な能力があると感じた。

8.地図比較

1989 年および 1997 年のゼンリン地図を読み取り、飲食店、商店、農地をそれぞれプロットした。それらを現代の地図に重ね合わせることで、谷田部の変遷を考察した。地図の青色が飲食店、黄色が商店、緑色が農地をそれぞれ表している。

まず飲食店についてである。1989 年に該当範囲に存在した飲食店の数は 18 店舗であった。1997 年になると、県道 19 号沿いや商店街内に飲食店が増え始め、総数は 35 店舗と、わずか 8 年でほぼ倍増した。しかし現在では、特に商店街を中心に飲食店の数は激減した。このことの背景には 2010 年につくば市役所が谷田部から現在の研究学園へと移転され、賑わいが減ったことが考察される。

続いて商店についてだ。1989 年は商店街を中心に多くの商店が立ち並んでいた。1997 年になると、商店街の商店の数は減少した

一方で、国道 354 号や県道 19 号など大通りに面している場所に商店が出現し始めた。2022 年現在もその傾向は顕著であり、商店街の商店の数は激減した。実際にフィールドワークとして谷田部の商店街を訪れた際も、シャッターが閉じたまま営業していない様子の個人経営の商店であったであろう建物が多く見受けられた。一方で県道 19 号沿いや国道 354 号沿いには、ファミレスや薬局などチェーン店の大型店舗が多く存在していた。

最後に農地についてである。1989 年、谷田部の土地の多くは農地として利用されていた。特に現在の国道 354 号線の北西側と県道 3 号線以西に多かった。1997 年も 1989 年とほぼ同様である。1989 年、97 年ともに国道 354 号線の北側は農地であったのだが、2022 年現在国道 354 号線以北で農地はほとんど見受けられず、谷田部全体でみても激減したことが分かった。一方で谷田部川の流域は、以前は農地として利用されていない荒地であったのだが、現在は農地として利用されるようになった。



図 2 1989 年プロット地図



図 3 1997 年プロット地図



図 4 2022 年プロット地図

9.提案

以上より、谷田部の歴史的な背景を踏まえ谷田部を活性化する提案を行う。

元来車通りの多い商店街が、人々に谷田部商店街を歩いてもらうことで、休憩、食事、買い物といったお金を使うイベントが発生し、活性化につながると考えた。

また、商店街に人を呼ぶためには、商店街に来る人の動機付けを充実させることが重要である。

谷田部商店街の魅力を発信するため、視覚的にわかりやすいマップを作り、それを用いて商店街活性化の具体案を述べる。

私たちは、以上のことを踏まえ、谷田部 de マーケットを提案する。

9-1 現在の活動

谷田部では現在年に一回秋に地域交流イベントとしてオートムフェア in 谷田部を開催している。2022 年の開催では、藤田研究所と共同で AR を使った催し者や谷田部の文化をモチーフにしたプロジェクションマッピング、物産展、ステージイベントなどがあつた。

9-2. 事例 つくいち

つくいちとはつくば駅前公園などのつくば市で月に一回行われる市部。“生産者と消費者が触れ合える場を作りたい”という思いをもとに 2008 年よりつくば市民により企画、開催をしている。自家製の物品や茨城の素材を使った加工品が売られている。

9-3. 谷田部 de マーケットの提案

私たちは谷田部の千歳通りで開催する、谷田部 de マーケットを提案する。谷田部 de マーケットでは簡易に建てられた出店で谷田部にある、和洋菓子店・唐揚げ屋・農産物などの販売。また隣町からも人を呼び寄せるためにつくば市各地の物品や加工品も販売。月 2,3 回程度開催し、生産者と消費者が繋がることのできる場所を目指す。

9-3-1. 谷田部 de マーケットの有用性

文献調査でもあったように谷田部は昔、交通の結節点として栄えたという歴史がある。そして、千歳通りの周りには陣屋やつくば市庁舎があったことから谷田部の中心となり、人を呼び寄せるポテンシャルを持っている。高野屋商店さんのヒアリング調査の中でもあったように谷田部商店街はイベントごとに強いという長所を持っている。このようなことから谷田部の千歳通りで行う谷田部 de マーケットの有用性が高いと考えられます。

9-3-2. 谷田部 de マーケットの効果

つくば市や隣町からの訪問者が増加し、初めて訪れた人たちに谷田部という町を知ってもらえる機会になる。また、このマーケットで人と人、地域と地域のコミュニティーを形成する場になり、マーケット自体が新たな谷田部の魅力になりえます。最終的には谷田部の衰退を止めることができるのではないかと考える。

引用文献



図 5 谷田部 de マーケットイメージ

つくいち. (2015). 参照先: つくいち: <https://tsukuichi.jimdofree.com/>

つくば市. (2018). 行政区別人口表. 参照先: つくば市: <https://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/jinkohyo/index.html>

つくば市. (日付不明). 谷田部市街地の特徴. 参照先: つくば市: https://www.city.tsukuba.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/004/506/r2-yatabe.pdf

高橋 伸夫, 村山 祐司, 松村 公明, 吉村 忠晴, 側島 康子. (1992). つくば市における商業地域構造の変化. 地域調査報告, 14, 43-64.

小口千明・高橋淳・上形智香・新宮千尋・中川 紗智. (2014). 茨城県つくば市谷田部市街にみる往年のにぎわい. 歴史地理学野外研究, 16, 63~97.

人口統計ラボ. (2022). 参照先: 人口統計ラボ: <https://toukei-labo.com/2010/?tdfk=08&city=08220&id=231>

谷田部の歴史編さん委員会. (1975). 谷田部の歴史. つくば市: 谷田部町教育委員会.